

主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成する学級活動の指導の工夫 — 目標と関連した課題を発見し、解決の過程を可視化するマッピングボードを用いた話し合い活動を通して —

安芸高田市立美土里中学校 垣内田 充

研究の要約

本研究は、目標と関連した課題を発見し、解決の過程を可視化するマッピングボードを用いた話し合い活動を通して、主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成する学級活動の工夫について考察したものである。文献研究から、課題解決に向けた話し合い活動の全体像を可視化し、役割を担い、協働して実践し、他者から認められる体験を重ねることが、主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度の育成に有効であることが分かった。そこで、稿者は、マッピングボードを作成し、学級の課題解決に向けた話し合い活動に用いる取組を行った。その結果、話し合い活動に参画し、実践したことが人の役に立ったと感じた生徒が増加した。これらのことから、目標と関連した課題を発見し、解決の過程を可視化するマッピングボードを用いた話し合い活動を行うことは、主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成することに有効であるといえる。

キーワード：マッピングボード 目標と関連した課題の発見 参画 貢献

I 主題設定の理由

教育課程企画特別部会論点整理（平成27年）では「特別活動は、学校で生活する子供たちにとって最も身近な社会である学級や学校における生活改善のための話し合い活動や実践活動を通じて、主体的に社会の形成に参画しようとする態度や自己実現を図るために必要な力を養ったり、各教科等におけるグループ学習等の協働的な学びの基礎を形成したりする役割を果たしている。」¹⁾とあり、主体的に社会の形成に参画しようとする態度を育成する際に、特別活動が果たす役割の重要性について示している。特別活動における望ましい集団活動について、杉田洋（2013）は、集団の一員として自分も貢献しているという充実感がもてる活動が望ましいと述べている。

所属校の全校生徒に行った特別活動に関するアンケートでは、「みんなと力を合わせて、学校や学級をよくする」という設問に対し「よく当てはまる」と回答した生徒は37.2%、「自分のことよりも、学校や学級のことを考える」という設問に対し「よく当てはまる」と回答した生徒は17.2%であり、よりよい学校や学級のことを考え、貢献しようとする意識が低いことが分かる。また、生活の改善や向上のために進んで活動する生徒も少ない。これらのこと

から、生徒が、よりよい学校や学級にするために協働し、主体的に集団活動に参画することができるようにすることが取り組むべき課題であると考ええる。

そこで本研究では、よりよい学校や学級に向けた目標と関連した課題を発見し、解決の過程を可視化するマッピングボードを用いた話し合い活動を行う。具体的には、生徒に、既にある学校や学級の目標を捉え直して取り組むべき課題を発見させる。そして、解決していく際、マッピングボードで集団の一員としての役割や取組の過程を、協働して組み立てさせていく。このように可視化し、共有することで、考えの違いや利害の対立を克服しながら、改善・発展させ、やり遂げさせていく。さらに、相互評価により、他者貢献への肯定的な認識や充実感をもたせる。こうした生徒同士の活動を通して、主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成できる点に先進性があると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度とは

文部科学省（平成27年）は、主体的な活動について、基本的な生活習慣や集団や社会との関わり方、

人間関係などの問題について、何ができるかを考え、実行するなどの活動であるとしており、スティーブン・R・コヴィー（2014）は、主体的であるとは、自らの責任で行動や態度を選択することであると述べている。これらのことから、主体的であることとは、社会などの課題を見付け、解決しようと考え、自らが責任をもって行動や態度を選択することであるといえる。

社会の形成への参画について、林義樹（2015）は、参加者が、目的・目標・方法等の全体像を共有しながら、計画段階から実施・評価・伝承まで自ら役割を担い、関わりを広げて創意を結集する状態だとしており、活動に参加する者の参加の段階を、表1のように3段階で示している。

表1 林義樹（2015）の参加の段階

参集	たまたまいあわせた個人的な参加で実行だけする。
参与	人と関わる小集団の参加で評価まで行う。
参画	目的・目標・方法等の全体像を共有しながら、計画段階から実施・評価・伝承まで自ら役割を担い、関わりを広げて創意を結集する。

ロジャー・ハート（2000）は、子供の参画の主体性の高まりについて、①操り参画②お飾り参画③形だけの子供の参画④仕事は割り当てられるが、情報は与えられている参画⑤意見を求められ、情報を知らされる参画⑥大人が着手し、大人と子供と一緒に決定する参画⑦子供たちが始め、子供たちが指揮をする参画⑧子供たちがやり始め、大人と一緒に決定する参画という8段階で示し、段階④から段階⑧を参画としている。稿者はハートの段階④を、なぜ活動するのかという情報は与えられているが、自発的に仕事を選んでいないという主体性の観点から、表1の参与と同等であると捉える。本研究においては、表1の参画の段階とハートの段階⑤から段階⑧を主体的な参画と捉え、論を進めていく。なお、杉田（2009）は、学級や学校は子供たちにとって、小社会であると述べており、本研究における社会の範囲を、学級や学校が基盤であると捉えることとする。さらに、赤坂真二（2016）は、その学級や学校全体の利益になることとして、他者貢献を挙げ、自分の能力を発揮して、人のために行動することだとしている。

他者との相互作用によって生まれる貢献について、小倉広（2014）は、アルフレッド・アドラーの言葉から、自分は誰かの役に立つことができたと感じることだと述べており、栃木県総合教育センター

（平成25年）は、貢献している姿について、他者や集団に対して自分が役に立つ行動をしていることだと述べている。これらのことから、貢献しようとする態度とは、自分の能力を発揮して、人のために自分が役に立つ行動をしようということだといえる。

以上のことから、本研究における主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度とは、子供自身が、よりよい学級や学校に向かう全体像である目標を共有し、自ら課題の解決方法を考える計画段階から関わり、集団の一員として役割を担い、他者と協働することで、人の役に立つ行動をしようということとし、その発達段階についての具体について稿者が表2に示す。

表2 参画し貢献しようとする態度の発達段階

参集	指示されたことに自分で判断し一人で実行する。
参与と貢献	自分の考えと、他者の考えを交流し、与えられた仕事を実行することで役に立つ行動をしようとする。
参画と主体的な貢献	目標を共有し、自ら課題の解決方法を考える計画段階から関わり、集団の一員として役割を担い、他者と協働することで、人の役に立つ行動をしようとする。

2 主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成するために

渋谷真樹（2015）は、子供自身が創意工夫をしたり、仲間と協力したりする活動の充足感の中で、主体的に社会の形成に参画する喜びを学ぶと述べている。また、文部科学省（平成27年）は、特別活動において、自分たちが所属する集団や社会の充実と向上のために、意見の違いや多様性を生かしつつ集団として意見をまとめていく話し合い活動が、社会参画の意識を養うものの一つであるとしている。さらに林（2002）は、参加者が、当該の集団が置かれている外的状況及び内的状況の全体像を、ありありとイメージできるように情報を提供し共有化することが参画を促すとしている。これらのことから、主体的に社会の形成に参画する態度を育成するためには、学級や学校の生活の向上に向けた話し合い活動や、創意工夫をしたり仲間と協力したりする活動を取り入れ、これらを充実させることに重点を置く特別活動における学級活動において実施していくことが有効であるといえる。赤坂（2016）は、仲間と協力したり活動したりする集団は、自発的な利他行動を生むとし、他者への関心→利他行動→達成→関係性の向上のサイクルを重ねて貢献する態度が育成されていくと述べている。原田綾子（2014）は、子供が貢献

したという気持ちを育てるためには、学級や学校のために協力・活動したときに感謝を伝えることや意図的に子供に役割を与えるなど、子供が活躍できる場をつくるのが有効であるとしている。

これらのことから、特別活動における学級活動において、学級や学校の生活の向上に向けた話し合い活動や、創意工夫をしたり仲間と協力したりする活動の全体像を共有化しながら、自己を生かす役割を担い、協働して実践した後、他者から感謝されることで達成感をもつ関係性の向上のサイクルを重ねていくことが、主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度の育成に有効であると考えられる。

3 主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成する学級活動の指導の工夫

(1) 目標と関連した課題を発見し、解決していく学級活動について

学級活動をスタートさせるまでの目標設定について、杉田（2009）は、①学校教育目標②学年目標③学級づくりの目安④学級目標⑤子供の思いを大切にしたい学級の生活づくりの目標という流れで行う必要性を述べており、学校教育目標という大きな枠組みと学級目標や子供の活動目標を関連させていく必要があるといえる。また、中村孝太郎（2000）は、集団活動の目標は集団成員の話し合いにより決められるもので、具体的活動のめあてになるものであると述べている。さらに赤坂（2015）は、学級目標とは、共通の課題で、課題解決集団になることを目指してクリアすべき指標であり、様々な学級における活動と連動して、活用されるものであると述べている。これらのことから、学校教育目標等の大きな枠組みの目標と学級目標とを関連及び活用させて、学級における課題解決の具体的な活動目標を話し合いで決める必要があることが分かる。

目標と関連させた課題を発見し、解決する話し合い活動に関わって、文部科学省（平成26年）は、目的意識や問題意識を明確にして話し合い活動に取り組むことができるようにするには、一人一人の生徒が、事前の活動を丁寧に進めるとともに、決まったことの実践化を図ることを重視することを示している。また、杉田（2013）は、子供自身が、話し合い、実践、振り返りの一連の活動の見通しをもち、議題、提案理由、話し合いの柱を子供たちが明確にしながら話し合い活動の計画を作成できるようにする必要があると述べている。奥田陸子（2009）は、マッピングによ

り、課題に対する全体像と課題との関連を分かりやすくし、計画を立てやすくすることができると述べている。奥田（2009）は、マッピングの手法について、①共通の価値観②戦略③仕組み④体制⑤スタッフ⑥技術と知識⑦リーダーシップという七つの指針を提示してあるシートを活用することであると述べており、これにより、子供の参画を絶えず改革し続けることができるとしている。

しかし、この手法は、大人が常にリーダーとして子供と活動することが基本になっており、子供同士が協働的に話し合いを進める方法までは言及していない点、また、活動の全体像を一目で見ることができないという点に改善の余地があると考えられる。

そこで、稿者は、目標と関連した課題解決の過程の全体像が、一目で分かるよう可視化することにより、生徒が自分たちで活動を選択し、創意工夫しながら集団や人の役に立つための活動に取り組むことができるようにする。

(2) マッピングボードを取り入れた話し合い活動について

学校教育目標、学級目標に示された目指すべき生徒の姿と集団の現状との差が学級の課題、学校の課題であると考えられる。その課題解決の手立てとしてマッピングボードを作成し、用いる。

本研究で用いるマッピングボードとは、学級集団で決定した目標の達成に向けて、目標と関連した課題の発見、計画を立てる、役割を担い仲間と協力し創意工夫しながら実践、評価する活動までの全体像を示したものである。活動の過程を①活動の目標②活動の目標の達成に必要な活動③活動内容、ルール④自分がすることを決める⑤進行状況を見直す⑥改善策を考える⑦活動の評価⑧自分の役割と実際の活動⑨他者からの評価⑩活動後の思いという10項目に分類して明確に示している。生徒は、活動の進行状況に応じて①～⑩の項目を話し合いの柱として選択し、ホワイトボードに取り出すようにする。話し合いの柱をグループの構成員が共有して話し合い活動に取り組めるようにすることで、生徒同士で主体的に、話し合い活動や実践を協働的な活動に充実させていくことをねらっている。話し合いで決定したことはマッピングボードに記録するようにする。実践後は、自己評価による振り返りと他者評価を行い、感謝の言葉や個人のがんばりを承認させることで、取組に対する自分が担った役割が、人のため、集団のためになっていたことを実感させていく。

このように活動の全体像も部分も可視化すること

ができるマッピングボードを用いて、生徒同士の話し合い活動を充実させることでよりよい活動としていく手立てとする。

(3) 目標と関連した課題を発見し、解決の過程を可視化するマッピングボードを用いた話し合い活動の構想

これまで述べてきたように、目標に関連した課題を発見し、創意工夫しながら解決していく社会の形成に参画する活動と他者に貢献する活動を一連の活動としてつなぎ、活動に参画し、継続的に貢献しようとする態度を育成する指導を行う。社会の形成に参画していこうとする態度と貢献しようとする態度を育成するための活動の全体像を、マッピングボードを用いて可視化し、構成員が活動の目標を共有し、話し合い活動により取組計画を決め、実践する活動と、他者からの評価により、人の役に立ったことを実感することにより、社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成するための構想を図1に示す。

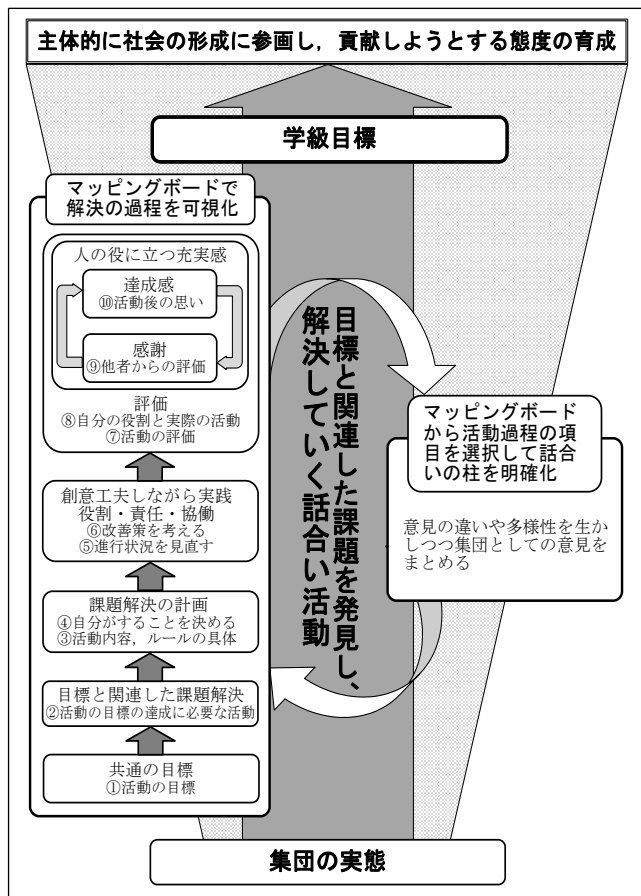


図1 本研究における構想図

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

マッピングボードを用いて、目標を共有し、課題の解決の計画段階から関わり、集団の一員として役割を担い、協働して実践した後、感謝される活動をすれば、主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成することができるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	方法
○マッピングボードを用いた話し合い活動が有効であったか。 ・目標を共有し、自ら課題の解決方法を考えることができたか。 ・計画段階から関わり、集団の一員として役割を担って参加することができたか。 ・他者と協働して人の役に立とうとしているか。	○マッピングボードの分析・考察 ○行動観察 ○質問紙による事前・事後の分析・考察

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 平成28年6月15日～平成28年7月11日
- 対 象 所属校第2学年（26人）

2 研究授業の概要

所属校の学校教育目標は、「美土里を愛し、志高く、主体的に学ぶ生徒の育成」である。年度当初、生徒は、学校教育目標と自分の現状とを関わらせて振り返り、それぞれ個人の目標を決定した。そして、互いによりよくなるために、学級の課題や学級に対する思いを出し合い、「感動～全力は心を動かす～」という学級目標を話し合いにより決定した。この目標には、最高学年に向け、より主体的に学習や部活動に取り組みたいという願いが込められている。

本研究では、学校行事である修学旅行の目標を学校教育目標及び学級目標と関連させて、学級の課題を解決していくよう学級活動を設定した。

学級活動（1）では、題材を「どんな修学旅行にしたい？心に残る修学旅行にしよう」とし、学校行事である修学旅行に向けての取組を、学級の課題の改善にも関連した活動にするために、活動の目標を設定し取組を進めることとした。事前に、どんな修学旅行にしたいか、修学旅行に対する不安、学級の課題について質問紙調査を行い、学級活動委員会で議題を決め、話し合い活動を行った。まず、「楽しい修学旅行にするために」では、学校教育目標と学級

目標を踏まえ、質問紙調査の結果から分かる学級の課題解決と関連させた修学旅行の目標と必要な係を考える。次に、「係の活動内容を話し合いで決めよう」では、修学旅行に必要な係の活動内容、係の目標、自分の役割を決定する。「係活動の取組状況を確認しよう」では、係活動の進行状況を確認するとともに、よりよい係活動にするための改善策を話し合いで決めることとした。

学級活動(2)は、題材を「がんばっていたね ありがとう」とし、修学旅行に自ら役割を担い、参加し、実践する中で、他者からの肯定的な評価をもらうことで、人の役に立つことのよさを実感し、事後

の活動に主体的に参画し、貢献しようとする態度につながるようにした。

これらの一連の授業の概要を表4に示す。目指す生徒の姿は、主な活動内容で分割し、事前活動、話し合いによる計画、計画の実践、実践の評価、事後活動としている。

V 研究授業の分析と考察

生徒の変容について検証するため、次頁図2に示すマッピングボードの記述、行動観察における発言などを記録し分析をした。事前・事後に質問紙による調査を実施し、質問項目の回答の分析を行った。

表4 学級活動の授業の概要

月日、活動内容（マッピングボードの主な活用項目）	目指す生徒の姿【A－参画 B－参与 C－参集】
6月13日（月）事前活動1 質問紙による事前調査、学級活動委員会	
6月15日（水）第1時 学級活動（1） どんな修学旅行にしたい？心に残る修学旅行にしよう 【ア 学校や学級における生活上の諸問題の解決】 みんなの思いを取り入れた修学旅行の目標を立て、具体的な活動内容を考える。 （マッピングボード①、②）	A 自分や他者の考えのよいところを取り入れながら話し合い活動に参加し、他者と協働してよりよい考えを作っている。 B 自分の考えを書いたり、発言したりして話し合い活動に参加し、自分と他者の意見を比較して、自分の考えを述べている。 C 一人で考え、自分の考えを表現している。
6月16日（木）、17日（金）昼休み、放課後 事後活動1 目標を達成するために何をしたらよいか考える。 （マッピングボード①、②） 学級活動委員会	
6月20日（月）第2時 学級活動（1） 係の活動内容を話し合いで決めよう 【イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理】 修学旅行の目標達成のための係の活動内容を考える。 （マッピングボード③、④）	
6月21日（水）～24日（金）昼休み、放課後 事後活動2 学級活動（1）の活動を進め、係で決めたことや話し合っただけの思いなどをみんなに伝える。 （マッピングボード③、④） 学級活動委員会	A 目標を達成するための活動を具体的に考え、自ら役割を担い、他者と協働して計画を進めて実践している。 B 目標を達成するための活動を考え、役割を与えられ、他者の助けを得て、実践している。 C 目標を達成するための活動を一人で考え、指示されて、自分の役割だけを実践している。
6月27日（月）第3時 学級活動（1） 係活動の取組状況を確認しよう 【イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理】 よりよい活動になるように、活動計画の見直し、取組の改善を考える。 （マッピングボード⑤、⑥）	
6月28日（火）～7月5日（火）昼休み、放課後 事後活動3 取組を進めて修学旅行に向けての準備を各係でする。 （マッピングボード⑤、⑥） 学級活動委員会	
7月6日（水）～8日（金） 修学旅行	A 計画を他者と協働して実践し、活動中の他者のがんばりを感謝の言葉を付けて伝え合い、他者評価から、人の役に立つ活動ができたことを実感している。 B 計画を他者の協力を得て実践し、活動中の他者のがんばりを伝え合い、他者評価から、人の役に立つ活動ができたことを実感している。 C 指示されて自分の役割のみ実践し、活動中の他者のがんばりを書き、他者評価から、人の役に立つ活動ができたことに気付いている。
7月11日（月）第4時 学級活動（2） がんばっていたね ありがとう 【オ 望ましい人間関係の確立】 係全体の評価をする。 （マッピングボード⑦、⑧） 担当した活動がみんなの役に立っていることに気付き、実感する。 （マッピングボード⑨、⑩）	
7月19日（火）事後活動4 次の活動の決定・計画 （マッピングボード①、②） 質問紙による事後調査	A よりよい学校生活が送れるよう、次の課題を発見し、具体的な取組を考え、他者と協働して活動しようとしている。 B よりよい学校生活が送れるよう、次の課題を発見し、取組を考え、活動しようとしている。 C よりよい学校生活が送れるよう、次の課題を発見している。

こんな修学旅行にしたい。氏名() () 班() 係

修学旅行の 目標を決める	学校教育目標 美土里を愛し、志高く、主体的に学ぶ生徒の育成	どんな修学旅行にしたい？	① 修学旅行の目標を立てよう
	学級目標 感動 ～全力は心を動かす～	課題	

話し合い活動の内容	② どのような活動をしたら 目標を達成できる？ 必要な活動を考えよう。	③ そのために何をする？ 活動の目標、具体的な活動内容 やルールを考えよう。	⑤ 現状は？ どこまで進んだ？ ふり返ってみよう。	⑥ 具体策の改善・追加を記 入しよう。	⑦ 活動の評価。
係活動 係活動での話し合いでの 意見や計画、決定したこ となどを記入するところ。		活動目標 活動内容やルール			

個人	④ 修学旅行、係の目標を達成するために 自分は何かができるだろう？	
	⑧ 自分が担当した役割と活動目標に対し、 実際にしたことを書こう。	
	⑨ 自分が活動したことについてよかったこと、みんなの役に立ったことを書いてもらおう。	
	⑩ みんなからもらった意見を見て、 今どのように思っているかを書こう。	

図2 本研究で使ったマッピングボード

1 マッピングボードを用いた話し合い活動が有効であったか

(1) 活動の目標と関連した課題解決について考えることができたか

学級の課題を、修学旅行を通して解決していくために、生徒はマッピングボードを基に、学級目標に対する現状と課題を出し合い、修学旅行の目標を「26人が楽しいと思えるように協力して最高の思い出にする！」に決定した。その後、修学旅行に必要な係や活動目標を決めていった。マッピングボードを用いて設定された、修学旅行における各係の活動目標と設定理由を表5に示す。

表5 各係の活動目標と設定理由

係名	活動目標	目標設定の理由
司会・進行・挨拶	メリハリを付けて、責任をもって行動する。	メリハリを付けることで学級に一体感が生まれ、仲のよい学級になる。
集合・TK (タイムキーパー)	一人一人が時間を気にして行動する。全員に時間が伝わるようにしっかり呼びかける。	「行動が遅い」「時間を守れない」という課題が改善され、集合時間に遅れることなく、時間を考えて行動できるようになる。
レクリエーション	みんなが楽しめるようなレクを考える。	みんなで協力するレクを行えば、クラスの仲が深まり雰囲気よくなる。
写真・調べ	みんなが笑顔になれて思い出に残る最高のBEST SHOTを撮る。	写真を撮るために見通しをもって行動しないといけないので、「先を見通して行動できない」という課題の改善につながり、笑顔が増える。

表5の係活動の目標設定の理由を見ると、修学旅行の目標と学級の課題とが関連していることが分かる。これは、修学旅行における係活動の目標を課題と関連させて具体化するために、「この活動を行う

と、学級のこんな課題が改善され、よりよい学級に向かうようになるだろう。」というマッピングボードの項目②と項目③を意識させる考え方を提示したことが有効であったと考察する。このことにより、生徒は学級の課題と係活動の目標とを明確に関連付け、各目標と関連した課題解決に向けた活動内容を考えることができるようになったと捉える。

図3に、質問紙の「わたしの学級は、目標を決め、達成に向けて取り組んでいる。」という設問に対する回答結果を示す。また、前頁表4で示した目指す生徒の姿を基にして、参画し、貢献しようとする態度の分析を表6に示す。

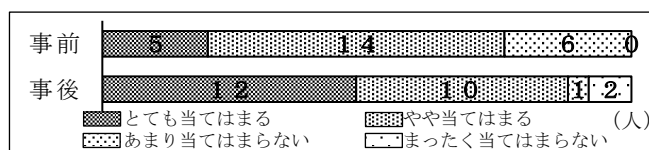


図3 「わたしの学級は、目標を決め、達成に向けて取り組んでいる。」に対する生徒数【総数25人】

表6 各活動における参画し、貢献しようとする生徒の態度【第2学年 26人 欠席者有り 総数25人】

題材・議題	目指す生徒の姿(人)		
	A	B	C
第1時 どんな修学旅行にしたい？ 心に残る修学旅行にしよう	4	14	7
事後活動1	7	13	6
第2時 係の活動内容を話し合いで決めよう	6	12	6
事後活動2	8	14	3
第3時 係活動の取組状況を確認しよう	10	12	3
事後活動3	12	8	6
第4時 がんばっていたね ありがとう	19	3	3
事後活動4	10	12	3

図3を見ると、肯定的な回答をした生徒数が3人増加している。その中でも、「とても当てはまる」と回答した生徒は7人増加した。また、表6を見ると、係活動の目標や活動内容を中心に話し合っている第1時から第2時において、話し合い活動に参画するAの生徒の人数が4人、7人、6人と僅かな変動が増加している。

これらのことから、マッピングボードを用いた話し合い活動は、活動の目標と関連した課題解決について考えるために有効であったといえる。

(2) 課題解決について考え、発言したり書いたりして計画段階から参加することができたか

全ての生徒が課題解決の計画段階から参加することができるよう、マッピングボードによって、活動の全体像も部分も可視化するだけでなく、図4に示すように、生徒が話し合いの項目を活動の進行状況に応じて選択し、マッピングボードから取り出して話し合うことができたようにした。マッピングボードを用いた話し合い活動の様子を図4に、マッピングボードから生徒が話し合いの柱を選択し、グループで係活動について話し合っている様子を図5に示す。



図4 マッピングボードを用いた話し合い活動の様子

生徒1：（マッピングボードの項目③を話し合いの柱に選びホワイトボードに示しながら）今日は係の目標と具体的な活動内容を考えます。例えば、課題の中から大きな声を出すとかキーワードを選んで一人一つ考えてみよう。

生徒2：この中から係の目標を決めるキーワードを選ぶ。班員：（付箋に意見を書いてボードに貼る。）

生徒1：じゃあ、これからみんなに目標に入れるキーワードを言ってもらいます。生徒2。

生徒2：人任せにしない。

生徒1：それは何で？

生徒2：人任せにしたら自分は仕事を何もしないし、任せられた人は仕事が増えて大変になる。～中略～

生徒1：（ルールについて）自分が司会をするときに、みんなにどうして欲しいかな。

生徒3：うるさくされるのが困るから静かに。

生徒1：静かにしていなかったらどうしよう？

生徒3：注意する。～中略～

生徒1：これくらい？じゃあ。ルールの一つ目は、（と、ルールの確認をした後、）④の役割は前に決めたから、練習とかあると思うので、式ごとにここはこうした方がいいというようにしていこう。来週の月曜日までにしおりに書くねえ、・・・

図5 マッピングボードを用いて、グループで係活動について話し合い活動を行っている様子（稿者が下線を記す）

図5の下線部から、このグループは、活動の状況に応じて主体的に活動を選択し、話し合いの柱を明確にしなが、各目標と自分たちの活動を関連させて話し合うことができていたことが分かる。また、項目を基にグループの構成員が自分の考えを付箋に書いて可視化したことで、自他の考えが明確になり、積極的に話し合い活動が行われていたことが分かる。他の係も同様に、マッピングボードを用いて限られた時間の中で、調べたり、準備したりする生徒の姿が見られたことから、計画段階から参加していることが分かる。

図6に、質問紙の「わたしの学級は、みんながよりよく学校生活が送れるように話し合いをしている。」という設問に対する回答結果を示す。肯定的な回答をする生徒数が6人増加した。

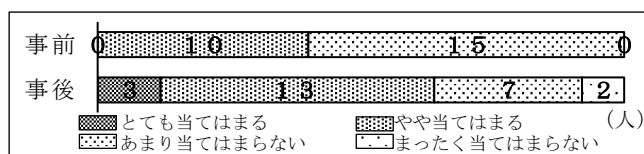


図6 「わたしの学級は、みんながよりよく学校生活が送れるように話し合いをしている。」に対する生徒数【総数25人】

また、表6を見ると計画を立てて参加する過程に当たる事後活動2から事後活動3における参画し、貢献しようとするAの生徒の人数が8人、10人、12人と増加していることが分かる。

これらのことから、マッピングボードは、課題解決について考え、発言したり書いたりして活動の計画段階から参加するために有効であったといえる。

(3) 役割を担って活動に参加し、他者と協働して人の役に立とうとしているか

修学旅行では、各係で決めたそれぞれの役割を果たしたり協力し合ったりする姿が見られた。生徒の振り返りでも、笑顔の多い思い出深い旅行になったという言葉があり、修学旅行の目標は達成されたと考察する。修学旅行中は、人の役に立つ活動をしている人、がんばっている人の姿をしおりに記録させた。その記録を基に、第4時「がんばっていたね ありがとう」を行った。他者からの評価を受けた後の生徒の感想の一部を図7に示す。

○仕事をきちんとしていたことを認められていたので、うれしかった。

○頼りにされていることを実感した。うれしかった。

○自分ではあまりできなかったと不安に思っていたけど、上手にできていたと書かれていて安心したし、うれしかった。

図7 他者評価を受けた後の生徒の感想の一部

図7から、他者からの評価により自分では気付かなかった自分の活動が認められ、人の役に立つ行動ができていたと実感したことが分かる。

また、図8に示した質問紙の「わたしは、学級の人の役に立つことをしようとしている。」という設問に対する質問紙の回答結果を見ると、肯定的な回答をする生徒数が3人増加している。

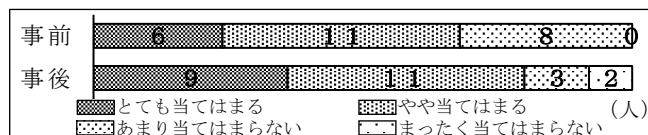


図8 「わたしは、学級の人の役に立つことをしようとしている。」に対する生徒数【総数25人】

さらに、表6の第4時の参画し、貢献しようとするAの生徒が19人と増加していることから、マッピングボードを用いて考えた計画に、役割を担って活動に参加することは、他者と協働して人の役に立つことに有効であったと考える。

しかし、生徒Aと生徒Bの2人は、図3、図6、図8に示した質問紙にすべて「まったく当てはまらない」と回答した。2人とも、自分では係活動が十分できていなかったと捉えており、第4時の他者による肯定的評価が十分に伝わらなかったことが原因と考えられる。だが、生徒Aは、係決定の話合い活動において、「係の数が五つだと、4人班は一人が二つの係をするか、班の中に担当がいらない係が出るから、係の数は四つがいいです。」というみんなの役に立つ発言をしている。生徒Bも、計画段階では挨拶や会の進行を考え、何度も練習をして、責任をもって自分の役割を果たそうとしていた。それぞれの貢献は、活動の全体に関わっているということを伝えたり、活動ごとに「よかったこと」「ありがとう」を見付けて伝える場面を設定したりすることができるよう改善し、日々の生活の中でも、人の役に立つことを実践し、実感できるようにしていくことを繰り返す必要があると考える。

これまで述べた第1時から第4時までの活動において、マッピングボードを用いた話合い活動を行ったことにより、生徒の参画し、貢献しようとする態度が多く見られるようになった。それを受け、事後活動4で、次の課題に向けて活動を考えてところ、10人の生徒が、日々の課題に対して他者と協力して取り組みたいことを発見することができた。表6の第1時と事後活動4を比較しても、次の課題を見付け解決しようとする生徒の人数が増加していること

が分かる。実際、事後活動4の学級活動委員会での話合いでは、マッピングボードの各目標と現状を関連させ、「学級の係活動の取組がきちんとできていない。きちんとしたい。」という意見があり、係活動の改善に対する取組を行った。その際も、各係でマッピングボードから項目⑥を話合いの柱として選択して話し合い、改善策を考え実践することができた。継続して活用することで、さらに主体的に社会の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成することができると考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

目標と関連した課題を発見し、解決の過程を可視化するマッピングボードを用いた話合い活動を行うことは、生徒が活動の進行状況に応じて話合いの柱を選択し、意見をもって話し合い、計画、実践、評価の活動に参加し、人の役に立つことを感じ、次の活動について取り組もうとしたことから、生徒が主体的に社会である学級や学校の形成に参画し、貢献しようとする態度を育成することに有効であることが分かった。

2 研究の課題

事後の活動において、学校の課題にまで目を向けた生徒もいたが、まだ、意識が学級内での活動にとどまっている生徒もいる。委員会や部活動等、学校の課題まで生徒の意識を広げるためにいろいろな場面で、マッピングボードを使用した課題解決の過程を継続して指導していく必要がある。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成27年）：『中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会論点整理』 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_ics/Files/afildfile/2015/12/11/1361110.pdf

【参考文献】

- 林義樹（2002）：『参画教育と参画理論—人間らしい「まなび」と「くらし」の探究—』学文社
- 渋谷真樹（2015）：『集団を育てる特別活動』ミネルヴァ書房
- 奥田陸子（2009）：『ヒア・バイ・ライト（子どもの意見を聴く）の理念と手法—若者の自立支援と社会参画を進めるイギリスの取り組み—』萌文社
- 杉田洋（2013）：『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』小学館
- 赤坂真二（2016）：『スペシャリスト直伝！成功する自治的集団を育てる学級づくりの極意』明治図書